札幌大学総合研究　第七号（二〇一五年十二月）

〈論文〉

田村（佐藤）俊子における『女声』―「信箱」「余声」を中心に（上）―

山﨑　眞紀子・周　珊珊（訳）

はじめに

本論は、本誌六号に掲載した「田村（佐藤）俊子、行為体としての『女声』創刊―川から海へ―」の続編となる。前論では、女声研究史を瞥見し、佐藤露英の筆名で小説家として出発した田村俊子の初期作品から、旧姓である佐藤俊子に筆名を戻してからの文筆活動、そして晩年に中国に渡り上海で「女声」を刊行するに至るまでの流れを見た。本論はそれを引き継ぐ形で稿を起こす。特に、俊子が中国名・左俊芝として、いわゆる「女性の声」を発するための媒体、女性啓蒙雑誌を上海において中国語で丸三年間発刊し続けた表現者としての行為体に注目し、その表現媒体である「女声」の分析を試みたい。方法としては、読者からの手紙に対して編集部が回答する読者と編集部との交流の場である「信箱」と、編集後記にあたる「余声」に的を絞って内容を詳細に紹介していく形で進めていく。この過程から読者が何を求めているか、何を考えているかを貪欲に知りたいと望み、読者の抱えている問題や苦悩に寄り添いながら、投稿者の人生が一歩でも前進するように力強く励ます田村俊子の姿が見えてくるはずだ。日中戦争下では日本の軍部が資金を提供して中国語で雑誌を刊行することの政治性や、凄惨な日中間の争いの中で日本人が編集長となって中国女性に寄りそって啓蒙活動を行うことの矛盾はこれまでの女声研究史でも論じられてきた[注1]。本論はこの政治性に焦点を当てるのではなく、田村俊子が上海という国際都市で感じ取った、一人

（一）

（二）

一人の人間がいろいろな事情を抱えながら生きていく、その姿に一つの彼女なりの文学の結節点が集約されているのが「女声」であると捉える。田村俊子が生涯を閉じた上海で、彼女が成し遂げた行為、作家で女優経験も持つ彼女の最期の表現媒体であった「女声」の肉声の一端を明らかにすることが本論の目的である。翻訳は周珊珊が担当し、山﨑が本論を執筆した。

第一章　創刊号「余声」から「信箱」誕生まで

まず、一九四二年五月の創刊号から「信箱」誕生までの経緯を見て行こう。創刊号（第一巻第一期）には、編集後記にあたる「余声」欄がある。以下はそのあらましである。

二十日間の計画を立てて、その結果「女声」をまもなく出版できる。これで毎月十五日に読者と会えるようになる。雑誌の内容は理想のように充実したものではないが、私たちはこの「女性」の場所を手に入れることができるのだ。読者にできるだけこの場所を利用してほしい。

「女声」は（一）女性の声、（二）女性のために声を発する、（三）女性が声を発する唯一の雑誌なのだ。この点を思いついて、編集室での同人たちは、この自慢の「余声」を載せずにはいられないくなった。今号の文章はほぼ数人の女性同士の作品である。中でも、就職して時間を割いて原稿を書いてくれる女性もいる。たとえば「家庭婦人の日常生活」の作者は、南京育材部課長の李蘊氷女史の作品だ。衛生欄の「女性生理期の症状と苦痛」を書いたのは郭太華という婦人科の女医であり、表紙の絵は女性画家・龍城女史の作品である。漫画も有名である万頼鳴先生から頂いたものだ。写真はすべて馬君が集めてくれた。

来月から、本誌は「信箱」コラムを設置する予定である。私たちの主旨を実践するために、女性が声を発する、そのために読者の手紙を掲載する予定だ。私たちは読者が積極的に信箱に投稿するのを願っている。ルールは、（一）楷書を使って、紙はおもて面のみを使用し罫に沿って一列を守って書いてほしい。（二）名前と住所は偽らないこと。掲載する場合は筆名でも構わない。（三）女性に関する問題

に限定する。

掲載を決めるのは本誌である。送られた原稿は一切返送しない。本誌は初刊なので、編集にはいろいろな問題があるはずだ。雑誌がますますよいものになるように、読者の皆様の意見を待つ。

以上に伺えるのは創刊にあたっての喜びで胸を高鳴らせ、気力溢れる想いである。創刊号の主だった記事名と簡単な要旨は本誌「札幌大学総合研究六号」の拙論において、その内容が多岐にわたることは確認済みである。何よりも「女声」発刊の目的である女性が声を上げる場所として、読者の声を重視したいとの意志を創刊号で強調し、「信箱」設置予告と投稿規定が明記された。

第二号の「余声」でも創刊にあたっての目的を強調し、読者とともに雑誌を作っていくことを繰り返し述べている。そして、「女声」を作る一番目の目的を知識階級の注意を引くと同時に、各階級の興味を導くことであると明言していることも興味深い。十五、六のコラム欄を設けたのもそのためだという。例えば、世界知識、娯楽、見聞、文芸、劇と映画、海外の女性、漫画、家政、衛生、日本語など、知識に関する欄がある。

そして、注目したいのは読者層の想定である。「女性に限定するに限らない、男性の読者もきっといると編集室のみんなは言う」とあるように、主語は「私たち」で語られ、編集長の独断ではなく編集室のメンバーと意見を出し合って決めている様子が文章から見えてくる。さらに男性と女性の繋がりは緊密であり、各問題の核には男女両性に触れなければならないとの意見を展開している。この主張などは田村俊子の文学が持つ重要なテーマである。第三期から、「女声」の範囲を広げ、女性の利益と家庭幸福に関心を寄せる男性読者の意見や批評も頂きたいとある。第二号では児童と女性の関係の親密さを考えて、児童欄を設置した。掲載量が多すぎて、やむを得ず「信箱」は来月に移すことになると記されている。

以上のように、二期では誌面の充実ぶりとともに編集長の俊子は編集室にいるメンバーと意見交換して誌面の工夫を図っていることがうかがえる。続いて、第三号の余声のあらましを見てみよう。

この誕生したばかりの月刊誌は、二か月が経過し、編集室の同人は頭を絞って、前月の雑誌を越えることに精一杯励んでいる。私たち

（三）

（四）

は雑誌の質がますますよくなり、読者を満足させることを目指しているのである。私たちはいろいろな読者からの手紙を受け取った。彼らは本誌への評価と承認を表すほか、大切な意見と指導も含んでいる。ここで、私たちは読者の意見を二種類に分けてみる。（一）、文芸の内容が少なく、質が高くない。（二）、題材があまりにも平凡すぎて、ありふれた話を繰り返す恐れがある。私たちはこの二つの欠点を認める。「女声」の創刊号で、本誌の主旨は女性のために声を発するということを強調した。つまり、本誌は純文芸の雑誌ではない。この点について、読者のご理解をお願いする。この問題に関して、私たちも何度か議論した。短い時間で読者の皆さんを満足させるために、文芸の内容を広げなければならないという結論を出した。「満足させる」という言葉から筆者は、雑誌の編集者とレストランのチーフは同じだと思える。お客さんの好みはそれぞれ違っている。酸、甘、苦、塩だけではなく、地域によっても違っている。たとえば、四川の辛さ、寧波の塩、一部分の広東出身の人は苦瓜が好きだ。チーフとして、客を満足させるのは大変である。読者の好みもそれぞれ違っている。そのため、文章も五味がある—軟、硬、平、俗、雅。硬は辛、軟は甘、平は塩、俗は酸、雅は苦と喩える。刺激的な硬は「女声」と合わない。色っぽい軟は「女声」には許されないことだ。幸いなのは、この二、三号には、平凡を超えた雅かさがなくても、世俗の酸っぱい文字もない。私たちの作品は恐らく平だと思う。平は生活で欠かせない塩のことだ。平凡な論調のようだが、これは千年に渡っても変わらぬ真理だ。平凡であるほど平和を導くことができる。私の論調が言い過ぎなのかもしれないが、事実が人々を感動させる文章は苦味を帯びている。一方、人々を満足させるために、五感を同時に使わなければならない。本誌は文章を収録する方針に際して、この点を忘れていない。

このように、創刊号から第一巻第三期（三冊目）では、短期的に注目を集める刺激的な記事や各地域、各人のニーズに合わせる記事で誌面を埋めるのではなく、共通の基盤となる地味ながらもなくてならない記事で誌面を構成する決意が固まったことが書かれている。とりわけ目を引くのは、平凡であることが平和を導くという考えである。いよいよ四期には読者の声からなる「信箱」が掲載されることになる。投稿が先に載り、その直後に編集人が答える形を取っている。そのフォームは、編集人は「編集先生」と呼びかけられ、投稿者は名前を挙げられて回答を受ける。次章は第一巻第四期に掲載された信箱から始めるとする。

第二章　信箱第一声から第一巻第七期までの信箱と余声

信箱の第一声は、読書好きで特に女性雑誌を愛読し、偶然に「女声」と出会って、固定読者となった女性からである。第一巻第三期の児童欄で「麗珍はこういう風に夏休みを過ごした」[注2]を見て、子供にも読ませることにしたが、十五歳の長男は以前、『子供』という雑誌に投稿したことがあり、キャンディと鉛筆をもらったことから、自分も「女声」に投稿できるかと聞かれたので、それを問う清女史からの手紙であった。編集者からの回答は、本誌が児童欄を設けているのでもちろん歓迎するし、特に児童の創作を待っているとある。掲載に当たっての謝礼については言及されていない。

同期二番目の投稿は、大学で児童心理を勉強した母親からの投稿である。長男は八歳、長女が六歳、三男は三歳、三人の子供の母だが、長男の知能がほかの子より低いと最近気付き、学校の先生からもそう言われたことがある。ある心理学教授に問うたところ、長男はほかの子と離すことを勧められた。長男の自尊心を保護するため、この意見は実行すべきかどうか悩んでいるとの張女史からの相談である。

回答者は、女史は子供の責任を負い、子の自尊心まで考える立派な母親だと感心している。児童教育について研究したことがないのでうまく答えられないが、女史の厚意に背かないように、ある有名な哲学者の言葉、「成功者は天分がある人。だが、その才能は三割しか占めていない。環境が七割を占めている」を引用して答えている。教育の力は天分より環境が大事だ。そのために子の自尊心を保つことを重視し、また、家庭内での子供同士の切磋琢磨のためにも、子どもを隔離させることは競争心を失わせる恐れがある。だから、一緒に育てた方がよいという意見を述べている。以上のように今期は初めて信箱が開設され、直接読者の声を聴き、それに誠心誠意答えているさまがうかがえる。

余声では、様々な原稿があるので一ページを割いたとの事情が綴られ、採用選択権は「女声」編集人にあることを強調している。ちなみに、信箱回答時の呼称は「私たち」が使用されている。なお、本期の余声では七万字の長編小説を募集し、第二巻の第一期（通算十三冊目）で発表する予定であり、応募要項の詳細も記されている。

続いて、信箱二回目の第一巻第五期では、「女声」はその名の通り女性のための雑誌であるのだから、女性において重要な育児関連記事、

例えば妊娠期の保護、赤ちゃんの保育、児童教育、飲食衛生、病気と服装など、人々に無視され、ほかの雑誌で読めない内容を掲載してほしいとの薇娟女史からの要望が掲載された。そのような記事内容が掲載されることによって知識が浅い女性も勉強できて、子供の教育をしっかりして、立派な人材を育成できると女史は強調する。編集者は、例えば、第一期で「どうして私の子がそんなに痩せた」、「女性生理期の症状と苦痛」、第二期の「児童教育」、第三期の「少女の苦痛時期」、第四期の「妊娠期の衛生と病」などを掲載していることを顧みながら、まだ発刊をみて五期にすぎず、量的には多くはないだろうが、これからも同様の記事を掲載すると述べている。

次に、二十歳の武昌女史からの手紙である。女史は裕福ではないが、物質上の困窮もしていない家庭に育った。だが母は無知な女性で、毎日ギャンブルにふけり、飲食も不規則で子供の教育にも関心がない。父はもともとは分をわきまえた商人だったが、仕事に疲れて帰宅しても妻から慰めをもらえないために、徐々に帰宅しない日が多くなった。幸福な家庭が崩れる恐れがあるので、母に説得を試みるが、彼女はぜんぜん聞きいれない。このままでは私と弟の未来も見えなくなる、どうすればよいか、という相談が寄せられている。回答者は親戚の中で（もちろんギャンブルしない人）、母に信頼された人に頼んで、母を説得することを勧め、母にはギャンブルをほかの趣味に替えることを提案している。

なお、本期の余声では、前期で予告した投稿募集に関して応募が多かったこと、選考の結果、第一位は陳俊憬の「キスの新発見」、第二位は厳君「青年心」、二編とも小説である。来月掲載予定であることが記されている。

次に第一巻第六期の信箱は、二十一歳の霞方女史からの投稿である。彼女の家庭は裕福で女中を雇っていて、家事はしなくてよく、母親からも大切にされていたが、前月に母が病没してしまい父は継母をもらった。継母は経済権を握り、節約のために女中を首にして私に家事をやらせ、よく私を罵る。母の死に加え、継母のいじめは私にとって非常に苦痛である。結婚すれば家にいることもなくなるが、旧思想を持った父の気に入る相手が見つからない。私は自分で探そうとするが、父は許さない。継母の私への態度を変える方法、理想の相手を見つける方法、どうすれば幸福な生活を送れるか聞きたいという相談である。

回答者は、あなたの苦しみは個人の問題ではなく、千万の女性の苦しみであり、一般的に継母がいる家庭の親子関係はよくないもので、それは経済に因を発するのではないかと答えている。友達同士にしても、夫婦にしても、経済上の支配関係があれば、トラブルも出てく

るし、継母は経済上の権利を握っているので、その状況で継母の態度を変えるのは非常に難しい。方法としてはあなたが父から一部分の経済力をもらって、自分で自分の生活を支配する。あるいは就職し、経済的独立を実現する。継母に経済面で依存しなければ、彼女の態度を配慮する必要も無くなる。

また、理想の伴侶ができないことも苦しみであるとあなたは言う。愛情は人間の生活の中で大切なものである。しかし、結婚して生涯の依存もできるという考え方は母たちの世代の考えであり、もし結婚を出口と見なすなら、一つの支配者の掌からもう一人の支配者の掌に移すに過ぎず、奴隷の身分は変わらない。私たちは結婚しても経済の独立をすべきだと強調したい。あなたがまだ通学しているなら、真面目に勉強し良い先生と友達を作ること。そして、父と経済面をめぐって格闘し、生計を立てる技能、たとえば会計、書工、手仕事などを学んで経済的自立をはかってほしい。そうすれば、あなたが尊敬すべき人格を手に入れることができる。永遠に支配される運命から逃げられる。要するに、君の問題は経済問題なのだ。他人に頼る考え方をやめよう。

以上のように、経済力と支配関係を解き明かし、経済的な自立が問題のカギを握っていることを強調している。この信箱の話題を同期の余声では引継ぎ次のように綴っている。人間は生涯勉強、お互いに勉強すべきであり、そのために読者の批評がほしいこと、特に投稿内容は現実生活の内容を求めている。補足記事として、前期に記した投稿二等小説「青年心」の作者は十六歳の子供で、まだ未成熟かもしれないと言及している。

続いて、第一巻第七期の信箱である。上海では女性雑誌が不足しているので「女声」は海での灯台、砂漠での水のような貴重なものと記す於杭からのものである。彼女は、第五期「女声」掲載の東方明「私生児について」に法律面から質問を寄せたものだ。その内容のあらましは以下のとおりである。

この記事には「社会は私生児への観念について、現在私生児には法律上の保障があるが、たとえば生産、継続権があり、入学、社会活動に参加する資格がある…」とある。しかし、「六法全書」「民法」の親族篇を読み通したが、手がかりが少しも見つからない。民法は妾の婚姻上の関係を認めないので、妾が産む息子は「非婚生子」（嫡出子にあたると思われる）と呼ばれるが、妾が産む息子は私生児の地位よりは低くない。私生児とは、正式の結婚儀式を行わず恋愛関係にある男女の間に生まれた子だ（民法第一〇六二条を参考）。では、

（七）

（八）

社会はこの子についてどう呼んでいるか。民国二十一年十月二十九日、内政部は妾が産む子を以下のように解釈している。「現行の婚姻法に従い、妾は正当なる婚姻と認められていない。妾が産む子は非婚生子だ。父が認知するなら、新聞でその子の身分を承認すべきであり、そうでなければ戸籍では母の名前を記載し、父の名前は記載しない」とある。現実からみれば、私生児が利口で綺麗な人間であっても、社会あるいは国に力を捧げる立場にない。役に立たない青年になってしまう。東方明先生の書いた、私生児は継続権力が与えられているという規定の根拠はどこにあるのか。保障を支える法律規定はどこに記載しているか。「入学、社会活動に参加できる」について、東方明先生の論拠はどこにあるのかとの質問が寄せられた。

詳細に本誌を読まれていることに感謝を述べつつ回答者は以下のように法律にのっとって回答を寄せている。民国元年（一九一二年）から民国十七年までの北京政府が統制時代の法律によると、私生児の法律上の名称については「姦生子」と呼ばれ、民国政府以後の法律は「非婚生子」と呼ばれるようになる。大理院四年第一五四七号の判決案例によると、姦生子は財産を継続する地位は北京政府時期、すでに養子より高いことがわかっている。民法律第一〇六五条および第一〇七〇条によると、父に認められた非婚生子が婚生子と同一視される。各法律によれば、父に認められた私生児は普通の子供と同じに扱われる（私生児に関する法律を列挙する）。手紙で「『六法全書』『民法』の親族篇を読み通したが、手がかりが少しも見つからない」と書いてあったが、詳細に読んでいないのではないか。そして、「入学、社会活動に参加できる」という質問について、東方明君は今現在の法律を根拠として書いたわけではなく、ただ昔と比べたまでである。詳しい回答がほしいと手紙に書いてあるので、私たちは法律規定による回答をした。

次に二通目である。第六期の「売春婦の人生」という一文を読んで、民国二十五年二月一日発行した「人生書報」での朱君の「商売婦人の人生」という作品の盗作だと指摘した暁春の投稿についてである。回答者は、原稿の量が多すぎて、チェックが怠り盗作に気づけなかったことに謝罪している。

三通目は二十六歳の既婚女性・紋女史からである。悲惨な結婚生活が以下のように綴られている。十年前に母に従って、倍以上も年上の男性と結婚した。当時は若くて知識もなく、福州の封建思想に満ちた家庭にいたために、反抗の仕方がわからなかった。相手は結婚後、すぐ上海へ戻り、彼からも手紙も来なかった。だが、去年、突然に彼から私に上海へ来てほしいとの手紙が届き、母は私に上海に行かせた。

そして、彼の本当の顔を私は知った。彼はお金で女性を弄ぶ鬼だ。家には子供が数人いる。それぞれの母が違っている。私を上海に呼んだのは、彼の非常に複雑な家庭を管理させるためだったのだ。だが、私は家庭を管理する経験がない、言語も通じないし上海も初めて赴いた。私のような田舎出身の女は、すべてのことを一気に処理できない。努力したが追いつかず、よく彼らに貶められる。夫も最初は私に同情を寄せたが、徐々に私を罵るようになり、最近は罵るだけではなく殴るようになった。彼には新しい女ができたのだ。彼女を家に入れたいのだが、私が家にいる。彼は私が自ら家を出ることを狙っている。私はもはや故郷へ帰る交通が遮断されているし、彼から離れると誰も知らない上海で私は金もなく生きていけない。私は我慢するしかない。しかし、我慢できない。私は正々堂々と法律の手段で彼の顔を暴きたいのだが、法律の知識を持っていない。結婚式は田舎で行ったので証明がないし、上海には証人としての親戚や友達もいない。これで私と彼の夫婦関係は法的に認められるだろうか。私は「妻」の身分で彼を訴えられるか。それとも、他によい方法があるだろうか。

この相談に対する回答は以下である。現在の社会は依然として男性中心の社会で、封建思想の毒がまだ完全に取り除かれていないために、現在多くの女性が経験している苦痛である。あなたの場合、もし婚姻書があれば、刑法の風化を妨害する罪の第二二九条により、彼を訴えることができる。しかし、あなたの手紙には「結婚式は田舎で行ったので、証明がないし、上海には証人としての親戚、友達もいない」とあるので、民事によるしかない。まず、彼との同居関係を解消し、そして、彼に扶養金を要求する。扶養金の金額について、彼の地位と経済条件によって決まる。これは私たちの意見だと記している。相談者の悩みの大きさに比べればあっさりとしたもののように思えるが、それは因習的な男性優位社会において、この回答以外に他に方法が見当たらないからであろうか。

同期の余声には、この女性の悩みが反映されているように思える。そこには、投稿に当たっては「ドアを閉めて、家に座っている」ようなやわらかいことを控えて、女性の実際生活を書いてほしいこと、本誌と読者との距離を近づかせ、女性の実際生活を反映し、女性が生活で避けられない問題を議論したい意志を繰り返し綴られている。そして、最後に第一期から第六期まで、すでに完売で、新しい定期注文者は第七期から始まるとの知らせも掲載された。

第三章　第一巻第七期～第一巻第十二期における信箱と余声

（九）

第一巻第七期の信箱は、三通の手紙が紹介されている。上海の隣町に住む家庭環境はほどほどの十五歳の秋萍女史による投稿から始まる。「女声」を読んで、本当に勉強になると謝意を伝え、進学についての相談を始める。中学校へ進学したいが、故郷には中学校がなく、上海の中学校に進学したいが、旧い家庭からの許可が下りない。頑固な母は去年の秋に、私より八歳上の私の知らない男との婚約を勝手に結んでしまった。来年、結婚式を行うそうだ。私は抵抗したい。しかし、礼教、封建、専制というスローガンに圧迫された私は、どうしても声を出せない。私は引き続き勉強したい。そして、結婚を数年後に延ばしたい。弱い私はいい解決方法が見つからないので力をもらいたい。

回答者は、現実的な問題に触れている投稿からか、「私たちは感動している」から書き始め、「あなたは」と語りかけていく。あなたは辺鄙な田舎ではなく都会に近いところに住んでいる。それでもそういう目に遭っている。結婚は生涯の幸福に関わることだ。あなたは自分が望まない婚姻をし、学業を諦めてはいけない。私たちには二つの意見がある。第一、家族がいかに反対しても、あなたは徹底的に反抗し、婚約を解消するのは無理にしても、できるだけ結婚の日付を延ばすこと。次に、母に引き続き学業を継続する要求を出しなさい。少なくとも、独立できる技能を把握するまでは弱くて能力がない女が見知らない男と結婚するのは、どれほど恐ろしいことか。反抗しよう。あなたは若いのに、非常に向上心がある。学業を続けるなら、あなたの前途は非常によいものとなる。母の反応を見てください。何かほかの問題があったら、私たちに連絡してください。またあなたの力になる、と声援を送っている。

二番目の手紙は、子どもが多くいる萍女史からの避妊の相談である。回答者は、現在のように生活が厳しくなる状況で、子供を生むのは本当に恐ろしいことで、避妊に関しては多くの女性が悩んでいる。まずは長期の方法として手術がある。女性の輸卵管を結札し、子供がほしいとき、輸卵管を復元する。第二は、避妊具を使う方法で、男性用と女性用がある。これはいいものだが、完全に保証できない。要するに、今の医学界はまだ完全な妊娠を防止する方法を見つけられていない。あなたは、二つのものを同時に使える。最後に、むやみに薬を飲んではいけない。特に、妊娠した際に、勝手に堕胎の薬を飲むことはいけないと回答者は注意を与えている。

三番目の手紙は、自分の問題ではなく、親友の王さんの問題を相談する秀珍女史からのものである。王さんは二十五歳の女性で、大学

教育を受けたことがある。一昨年、同級生の張君と結婚した。二人の家はすごく旧く、家族がすべてのことを決めた。張君の家庭には、父のほか、地位や権力がある二人の妾がいてお互いに争っている。張君と彼の母の権利はますます弱くなる。父は孫がほしいので、早めに張君を結婚させたのだ。当時、張君は二十一歳（王さんより二歳下）。一年を経過しても孫ができないので健康診断をした際に、張君が結核に冒されていることが判明した。先ごろ張君が大学を卒業し、商業機関で会計員として務めている。彼の体を考えれば、家で静かに休むべきであるのに、父の二人の妾は経済面で張君を脅迫する。しかし、仕事をやめないと、張君の体が耐えられない。王さんは毎日落ち込んでいる。彼女はいま妊娠している。子供を生むと、社会に出ることも難しくなる。編者先生のご指導を頂きたいと綴る秀珍女史からの手紙である。

王さんの状況について、回答者は以下のように答える。肺病を患っている夫が仕事をするのは無理だ。彼を休ませて、王さんが就職すべきだ。しかし、いま王さんは妊娠している。妊娠期間に働くのは無理だ。この問題の唯一の解決方法は、父の助けを求め、父から療養の費用をもらう。王さんは子供を生んだ後、社会に出よう。王さんは教育を受けた女性だ。結婚するときも二十三歳になっていた。知識も、年も低くない女性として、自分の婚姻問題を自分の手で把握する能力があるはずだ。彼女の婚姻は旧勢力に妥協し、戦わない女性の生活の実例だ。今はまだ遅くない。王さんはまだ若くて、前途がある。彼女のことに対して、ほかの解決方法がない。彼女は最後まで頑張り抜いてほしい、未来の幸福のためにと。

同期の余声では、いま私たちは非常に厳しい状態に陥っていて、雑誌の出版が決して容易ではないと訴えている。読者も私たちのように、力を尽くして、自分の生活のために頑張り、暖かい希望を求め、自分の人生理想を実現してください。新年、おめでとうという年始のあいさつで締めくくられている。

第一巻九期の信箱は、第八期に掲載された修養欄の「知的な女性の理想の結婚相手」という文章について、座談会の記録形式だが、中には中学校を卒業した数人の女性の意見も含んでいる。彼女たちは大学教授以外の人を全部貶めている。座談会で交わされている内容、たとえば医者は感受性が乏しくて、看護婦と恋愛したり、弁護士は個人主義者、会計士は無生気な生活者、銀行員は拝金主義者などとしているが、私はこれを信じない。大学教授にも欠点があるに違いない。彼女たちは偏見が過ぎる。そして、私は理想の相手がなぜ自分よ

（一一）

り高い学識を持たなければならないのかということを理解できない。上記は私の意見だが、編集先生はどう思うかとの秀娟女史からの手紙である。

回答者は、「知的な女性の理想の結婚相手」という記事は私たちの知らない作者の投稿であり、生活と思想に関する記録であるため、私たちは作品の思想の正当性を考えず、内容が真実であれば、一部分の人の思想を代表できると思い掲載に至った。確かに、大学教授を無条件に褒めるのはよくない。私たちもこの意見に同意しない。知識女性としているが、自分の結婚相手を大学教授に限定しているのは偏見としか言えないだろう。現在、自由恋愛はまだ実現できず、女性生活が改善されていない若い女性にとって、結婚相手を探すのは非常に難しいことだ。不自由な女性生活、その上、社会に解放されていない女性の現実は、女性の虚栄心を形成させる。相手（夫）の栄耀で自分の不足を補おうとする。知識女性の場合、自分がより高い知識を持っているので、愛情にしても婚姻にしても高い要求を持つようになる。大学教授は知識のみならず社会的地位も高く、妻は官員の妻と同じように名誉を与えられる。「中学生は大学生と結婚したい。大学生は大学教授と結婚したい」。これは知的な女性の一般的な心理だ。掲載した文章は確かに正しくない。しかし、私たちはこんな思想を持っている人がいると単に紹介したかったに過ぎない。あなたの意見は正しくて、自由恋愛の立場からの発言だ。私たちは女性解放を求め、女性が真実で健全な自由恋愛ができるように頑張ってほしい、と回答者は答えている。

前回投稿した秋萍女史からの再度の相談が掲載されているが割愛する。次に挙げる投稿者は封建的な家に生まれて、大学で化学を専攻する孫明女史からのものである。「お嬢様なのに、必死に勉強する必要がないだろう。将来嫁になるとき、ちっとも役に立たない」と周囲から言われていることに対する不満を述べつつも、実際に社会で働いている女性は生涯を社会に身を捧げて、老処女と呼ばれている。結婚すれば、事業を諦めなければならない。今の社会では両者が共存できないそうだ。この矛盾について先生の指導を請うとする投稿である。

このような普遍的な問題に対し、回答者は現在中国の若い女性が解決を求めて、苦しんでいる実際問題であると指摘して以下のように述べる。この問題はあなた一人の問題ではなく、多くの知的な女性に共通する問題だ。現在のように錯乱した社会で、豊かな知識と技能を持っている人まで簡単に理想の仕事を見つけられない。生活のため、多くの人は専門知識を隠して、ほかの方法で給料を稼ぐ。さらに

女性は男よりもっと厳しい。社会の職業は彼女たちを採用しないだけではなく、彼女たちを阻んでいる。女性は社会での正当的な発展が実現できない。仕方がなく、物質的な援助を提供してくれる夫と結婚する。夫の金を使い、自分の体と思想を夫に捧げる。独立できず、意志も自由もない家庭主婦になってしまう。私たちはあなたに問題を解決して欲しい。しかし、これは非常に複雑なことだ。今すぐよい解決案を出せない。いまは一つの方法しかない。引き続き真面目に勉強して、いい成果を出してほしい。特殊な技能を持つ人は就職しやすい。次にあなたを理解し、尊重し、社会に出ることを支持する夫を見つける。最後に、結婚してもあなたはもともとの志願を忘れずにいることだ。「女は男と同じことをやろうとするなら、男より倍以上の努力が必要だ」この言葉を覚えておいてほしいと述べている。

同期の余声では今期は新年号であり、多くの雑誌は新年のとき「特大号」を出す。雑誌のサイズが大きくなるほか、独特な標題をつける。この点について、私たちも考えたが、結論としては見た目よりも内容の充実の方が重要だと思い、そのようにはしなかった。小説の募集について、投稿を受け取ったが改めて強調したいことは字数を守ることである。そして、第八期前の雑誌は本社にも在庫はない。購読希望者は売店で聞いてほしいとある。

第一巻第十期の信箱では、これまでに見てきたように親の決めた、本人の意に沿わない婚姻の苦しみが十九歳の俊卿女史から寄せられている。逃亡や自殺も考えたが果たせなかったとの手紙に、現在の女性がこうした悩みに陥っているが、まず大切なことは決して自殺してはいけないこと、自分の力で困難と闘うことを回答者は繰り返している。幸福は自分の手で作るも、もし何か問題がおきたらまた手紙で聞いてくださいとしている。二通目も同様に、未成年の娟萍女史から、月給は二七〇～二八〇元ぐらいの、健康状態がよくない人との縁談をこのまま進めるべきかどうかの手紙である。回答は、気に入らないなら、親に婚約破棄を申し出て慎重な態度を取って欲しい。あなたのような若くて利口な女性なら、いい相手に恵まれるのは容易だと答えている。

この期では、「知的な女性の理想の結婚相手」の執筆者・罗纹君からの反論も掲載された。文化レベルが上がらなく、社会が進んでいない今の時代、知識女性は彼女たちの目線は見た目に止まるしかいない。現実は秀娟が受け入れないことであり、秀娟も文章の表面しか読んでいないではないかとの反論である。回答者は、秀娟女史が雑誌を愛する立場で対立して議論をしたので、私たちはあなたも自分の意見を述べる機会を与えた。お互いの出発点もはっきりした。これ以上この問題を議論する必要がないと議論の場の公平性を強調するに

（一三）

とどめ、どちらの思想が正しいとするとの価値観は入れない立場をとっている。

余声では購読にあたっての具体的な注意事項が掲載されている。もし幣刊を購読したいならば、予約金を本社に郵送してほしい。幣社の従業員は忙しくて、家まで予約金を受け取りに行く時間がない。よその都市の読者は郵送料を九台、年間は一元、半年は〇・五元だの郵送料が必要である。よくよその都市からの読者の予約金を受けるが、郵送料が忘れられていることが多い。今年は非常に寒い冬だ。私たちは本号を準備しているとき、雪が降って来た。私たちはこの大雪を記念したいので、撮影技師を頼んで、外灘（ワイタン）（バンド）の雪景色を撮った。本号では、雪の景色を楽しんでください。毎月十五日の出版だが、編集社転居のために本期発行日は三日延ばしてしまったことをお詫びします、とある。

第十一号の信箱では、これまでの卑近な生活問題や因習的な婚姻の強要による苦悩ではなく、雑誌そのものの意見が掲載された。表紙絵や記事内容についての静波先生の意見である。表紙は古代美人の絵を使い、古風で典雅な趣があるが、特別な美観とも言えない。もっと人々の興味を引ける画を載せる方がより適切だと思う。また、古代美人の絵を載せても、顔の部分はもっと綺麗にさせるべきだ。雑誌の文章については小説の部分はよい。一般家庭の必要性に合わせてある。写真欄も設置されていて読者の興味を引く。挿絵もほかの雑誌でほぼ見つけられない内容だ。画が優れていて、有名な画家の作品だと思う。貴誌の販売価格は一・五元で、本当に安い。しかし、すぐ読み終わってしまうことが少し残念だと思う。小さいな意見を付け加えるとすれば、貴誌には生活に関する小品及び詩が足りないと思う。文芸は読者の文学レベルを上げるものだ。私はこのような内容がもっと多いだろうと期待していたが残念だ、というのが主な内容である。

回答者はまず、表紙への批評について先に答えている。中国の古代画は西洋画のように、写実的なものではない。中国の画は精神と形態から鑑賞するものだ。人物の顔かたちも同じだ。鑑賞すべきものは顔の美しさではなく、表情と態度の巧みを味わうべきだ。表紙を飾っているのは名画家・陈小翠の作品だ。彼女は中国の古代人物を描くことで有名である。私たちはできるだけ雑誌の内容を豊かにしたいが現在の紙と編集仕事のコストが非常に高い。いま、私たちの販売価格は二元であり、かつては一・五元であった。紙幅を増やすと、値段も上がってしまい、一般の読者が買えなくなる問題が発生するかもしれない。文芸の量が足りないという問題について、私たちは納得する。私たちはできる範囲で文芸作品を増やすつもりだ。

（一四）

ほかには、二十一歳の女性から既婚者との恋愛問題に悩む手紙と、「私の問題は普遍的な問題」との言葉を冒頭においた中流階級出身の婉女史からの手紙が掲載された。婉女史はマニラで幼年期をすごし、フィリピンに多くの友人を持つ。北京の有名な大学を卒業し、難民収容所の職員として働き充実した日々を送っていた。しかし、去年の冬、収容所が崩壊し失業してしまった。以来、私に仕事を紹介してくれる人もないし、私も他人を頼んで仕事を探していない。なぜなら金銭面で困っていない私は「社会には君より苦しんでいる人が一杯いる。君が彼らに席を譲ってあげよう」と人々が云うからである。だが、私は家にいると能力が下がると感じる。両親や親戚は私に結婚をすすめ相手を紹介し始める。私は独身主義者ではないが、女性がやることがないときに唯一の出口は結婚となってしまうことに疑問を覚える。私たちは学問を使うために勉強するではないか。だから、私は就職したい。働く人は必ず貧乏な人と見なされ、裕福な人は彼らに仕事の機会を譲らなければならないのか。私の北京での生活はよくない。私は女声の援助をもらいたい。私は新鮮な空気をほしいという内容の手紙である。

回答者は、経済に関係なく、ただあなたが社会に貢献したい意識に感心する。また結婚はけっして女の出口ではない。もちろんできる限りあなたの力になりたい。ところが、今の就職状況が非常に厳しい。円満な解決を提供できなくても、落ち込まないで、自分の主張を堅持すべきだ。引き続き頑張ってほしい。いい機会があったら、きっと助けてあげると記している。

余声では、転居で忙しかったために、前期の第十四ページから十六ページまでのページ数が間違ったことを謝罪している。そして女声の価格が一冊二元、一年二十元、半年十一元になる。二十元未満の場合、半年の雑誌を送るほかに、一冊二元の価格で計算する。十一元未満の場合、一冊二元で計算する。二元に足りない場合、返金するなどが記載されている。

第十二期の信箱では、男子中心の社会で、ずっと差別されている未亡人からの手紙が掲載されている。親が決めた婚姻の長い結婚生活を送ったが、彼の死に対して、別に悲しいとは思わない。私の家庭は旧式な大家族で社交の機会を持ってないために異性と接する機会もない。従兄のことを愛するようになった。神様が私たちの同居のことを許してくれるなら、私たちはきっと理想的な伴侶となるはずだが、私の従兄は既婚者で二人の子供がいる。彼と妻の仲は良くない。彼の妻は彼の傍から離れて、異国に去って三年経った。離婚の可能性が高い。彼は私と結婚したい。しかし、相手の行き先が不明なので離婚の手続きもできない。私たちはまず同居して、彼の妻が戻ってから、

（一五）

（一六）

離婚の手続きをしてもいいのかという匿名の女性からの手紙である。回答者は、今は昔のように、夫のために貞操を守る規定が無い。あなたは再婚できる。特に大家族での生活では苦痛を感じるのも当然のことだ。人間にとって感情は必要で、ゆえにあなたは従兄のことを愛するようになる。これはあなたの錯誤ではない。問題は、彼には妻がいることだ。第一、他人と社会を妨害しない。第二、自分の生活と前途を妨害しないならば、世論と世俗を恐れる必要はない。従兄夫婦は本当に仲がよくないか。従兄はあなたのために変わったではないか。あるいは、ただ一時の衝動ではないか。もし彼らの間には婚姻の幸福が本当に無いなら、子供の問題を考えてほしい。子供の幸福は無視できない。上記の点について問題が無いなら、君が好きなように従兄と恋愛しても構わない。同居は恋愛過程での一つの生活方式だ。生活上の必要があれば、私たちは同居を支持する。結婚式はただの儀式にすぎない。純潔で美しい愛情の本質があれば、結婚の形は構わない。私たちの意見は、愛し合うなら同居できる。結婚という形式を配慮する必要が無い、として筆をおいている。

他には、我が家には男の子がいないので、夫は童養嫁のように幼い時に家にもらわれ、現在結婚しても夫は寡黙で気概もないという相談や、子どもが授からなかった三十歳近い女性からの相談である。後者は、十年前に親の命令で結婚し、夫は私の美貌に惹かれ、私も博士としての銀行の経理と結婚できることを自慢に思っていた。結婚後の生活は非常に楽しかった。しかし、三年を経て、子供が授からず、夫は第二夫人をもらう気も無かったが、私は子供が欲しくて、夫に妹と結婚するのを勧めた（妹は私より一歳下だ。美しくないので、母は彼女を勉強させた）。夫は同意した。高等教育を受けた妹は自分が嫁に行くことの難しさを知っているので、孤独で生涯を過ごすより姉と一緒に暮らす方がよいと思った。私たちは仲がよく、妹は私の家に住み始める。このように無事に八年間を過ごした。今私たちには子供四人がいる。私はすべての家事を処理する。夫は出勤して、妹もある銀行で働いている。家には女中三人を雇っている。私は子供の世話をして、新聞と雑誌を読むだけで、生活は安定している。しかし、最近夫が家で夕食を食べなくなったので密かに調査したところ女性がいることがわかった。夫の心を取り戻す方法および私は夫に女性がいることを暴くべきか、この二点を問題として抱えている。もし、夫が私を愛していないなら、私と離婚したいなら、私はどうすべきかと問う秀麗女史からの手紙が挙げられている。

回答者は、夫が本当にあなたを愛するなら、彼はほかの女と結婚しないべきだったし、彼は本当にあなたを愛するなら、あなたの提案に彼は拒絶すべきだった。彼があなたの妹と結婚することは、彼があなたを愛していてもエゴと好奇心をもっていることを証明している。

次に子供を愛情の最後の幸福だと見なすのは間違った家父長思想だ。あなたの夫は多妻制度をするのは個人の好奇心のほかに、封建思想もある。封建思想を持っている男は無意識的に女性を蔑視する傾向がある。そして、君の妹と結婚するのは彼にとっては、複数の女と結婚できる暗示である。この点について、あなたも責任を負うべきだ。つまり、あなたの夫はずっと女を弄ぶ気持ちを持っている。ただ機会を待っているだけだ。これは愛情が不穏の第二の信号だ。あなたと夫には二つの重要な関係がある。まずは愛情関係、次は経済関係。もし、あなたは夫に捨てられるなら、生存できない。彼も愛情であなたを裏切る。しかし、私たちは愛情がなくても生きられる。しばらく非常に辛いかもしれないが、この段階を乗り越えれば心安らかになれる。もっとも重要なのは経済問題だ。経済上の圧迫は人々を死なせる。しかし、この点について、あなたは心配する必要が無い。あなたに落ち度が無いなら、あなたの夫は離婚できない。あなたは反対してもいい、或いは慰謝料をもらう。一番よいのは、あなたも出口を探してほしい。子供に集中し、生活を妹のところに移す。妹の仕事を手伝って、助け合い独立した生活を作る。夫に依存しない。そうすれば彼はあなたに畏敬を抱き、もう一度あなたを愛するかもしれない。彼に女性がいることを暴くのは、喧嘩のような最低策だ。よく考えるようにと回答としている。十二期の余声には、これらの手紙は生活上の先生であり、私たちは本で勉強できない知識を把握するようになった。私たちは闇に包まれている向上心がある女性がこんなにいることがわかってきた。読者の熱意と信念を感じて、私たちはすべての知識を用いてあなたたちの問題を回復すると綴っている。

結びにかえて

以上のように「女声」第一巻第一期から十二期までの信箱と余声を見てきた。読者によって寄せられた声は旧制度下の婚姻に悩み、教育や自己実現のための就職、経済問題、男女の愛情関係など多種多様である。本稿で言及出来たのは、信箱と余声という「女声」においても非常に限られた誌面の、またその中でも全期を通した三分の一に過ぎない。本稿では紙幅の都合で本論はここで筆をおくが、別稿で引き続き検討していく。

はじめにでも述べたように、本論の目的は「女声」の研究を、日中戦争下のイデオロギーから離陸させ、編集発行人として左俊芝とし

（一七）

た中国名を用いた筆名で署名し、発行する資金や紙の調達、印刷を実際的に行った田村（佐藤）俊子の、表現者としての姿を映し出していくことにある。本研究は大きく分類すれば田村俊子の作家論として位置づけられるものであり、彼女が晩年に身を置き、そこで生涯を閉じた上海という空間における言説の動きを見ていくことにある。本論で見ることができたのは、女性を取り巻く封建思想に端を発する婚姻問題、教育や職業という制度的な問題から、育児や避妊、男女間の恋愛や、愛情問題など私的領域に及ぶまでの、普遍的な問題が浮き彫りになったことである。そして、「編集先生」と呼ばれている回答者は、編集部の声を合わせたものを意識させる「私たち」という一人称複数の呼称を用いている。こういった表現方法も注目すべきことである。

別稿でも引き続き信箱と余声に的を絞り分析していく。

注1　これまでの「女声」研究史は、本誌前号「札幌大学総合研究」第六号、二〇一五年三月掲載拙論「田村（佐藤）俊子、行為体としての『女声』創刊―川から海へ―」の冒頭部にまとめてあるので、参照されたい。

注2　劉英順「田村俊子主宰『女聲』の総目次（翻訳）」（「国文目白」二〇〇四年二月）には、「麗珍の夏休み」と訳されている。

※本論は平成二十六年度札幌大学研究助成金による研究成果である。